

# *Sense and Sensibility* における監視と プライバシー：Elinor の演技と Marianne の逃亡

武 井 暁 子

## 序

ジェイン・オースティン (Jane Austen, 1775-1817) が生きていた 18 世紀末から 19 世紀初頭は、ホイッグ党の進出、ブルジョワジーの台頭など、政治、経済、社会に変化が起こった時期である。産業革命は個人と社会の関係にも変化をもたらした。機械化が進んだことによって、女性労働力の需要が少なくなり、“domestic” な空間—家庭—と職場もしくは社会の分離が始まったのである。言い換えると、家庭生活と社会生活との間に厳密に一線を画する動きが出始め、プライバシーの概念も時期を同じくして始まる。<sup>1</sup> だが、オースティンの小説世界ではプライバシーの概念が完全に定着していない。個人の生活に社交生活という形で社会が侵入し、プライバシーも周知の出来事になる。オースティンは思想や道徳観などあらゆる面で過渡期に位置する作家であり、プライバシーのとらえかたでもまた過渡期に属するのである。

エマーソン (Ralph Waldo Emerson) とヘンリー・ジェイムズ (Henry James) はアメリカ社会とイギリス社会を比較し、イギリス社会はがっしりした構造を持ち、社会の構成メンバーに確かな存在感を与え、かつ一種の誠実さを強要し、イギリス人の特徴は自分達の生活は社会によって束縛されていることを強く認識している点だと理解した。<sup>2</sup> 歴史が長いイギリスでは個人と社会の結びつきが堅固である。オースティンの作品の舞台とな

る小さな共同体では人間関係が密で、社会の構成員としての存在と一個人の区別が非常にあいまいなため、交際は社会への義務になる。社会生活は個人の生活を支配し、住人同士監視しあう状態が日常化する。常に他人の目を意識しなければならない社会では、感情をあからさまにすることはプライバシーをさらけ出すことにつながり、自分の身を危うくする。

『分別と多感』(*Sense and Sensibility*, 1811) はオースティンの後期の作品に比べると、人物創造の未熟さ、不自然なプロットなどの難点はあるものの、初期の作品であるだけに、小さな共同体のゴシップ・詮索のわずらわしさや形式化した交際への批判がもっとも直截に書かれている。ジェイン・ナーディン (Jane Nardin) は「オースティンの作品の中で、『分別と多感』の二人のヒロインほど信じられないほど馬鹿げていて、飽くことを知らぬ詮索好きな人間の集団と否応なしの社交生活に取り囲まれたヒロインはない」と言う。<sup>3</sup> プライバシーが全くない空間で、主人公エリナ (Elinor Dashwood) とメアリアン (Marianne Dashwood) は現状に不満を抱きながらも、観察力と社会との適切な距離感覚を身につけ、社会と調和する。オースティンはプライバシーの問題及び個人と社会の関係をどのようにとらえていたのだろうか。以下、『分別と多感』に描かれている社会の監視とエリナとメアリアンの対照的な行動に言及しながら考察する。

## 1

エリナたちダッシュウッド一家は、父親の死後、異母兄夫婦ジョンとファニー (John & Fanny Dashwood) に追い出される形でバートンパーク (Barton Park) のコテージに移る。財産の継承・喪失はオースティンの作品の根幹を成す重要なテーマである。エマ (Emma Woodhouse) を除いて、オースティンのヒロインたちは多かれ少なかれ父親死亡後の生活に不安をかかえており、エリナとメアリアンは彼女たちの中でもっとも直接的に財産の喪失のダメージを受ける。

バートンパークへの引っ越しの際には、少ない財産でやりくりするため

に何を削るかが最大の問題になる。当時のジェントリーに必要な道具立ては豪邸と広大な地所、ロンドンの別邸、馬車、宝石、使用人などであり、一家はすべてを手放す。中でも家と馬車の喪失は重要な意味を持つ。社会生活の中で、人間は多かれ少なかれ他人の目を意識して行動する。ウィリアム・ジェイムズ (William James) の言葉を借りると、本来の自分と違う“social self”を演じるわけである。家庭は一人一人が社会的自己から離れ、自身を省みて“private self”を回復するための場所である。<sup>4</sup> 家を失ったエリナたちは本来の自己に戻る空間を奪われ、常に社会的自己を演じることを強いられる。また、馬車を持たないと、誰かに同乗させてもらわないかぎり移動手段は徒歩になり、自分で行動できる範囲が狭くなる。行動半径が狭められると交際相手も限定されて、そりが合わない人間とも交際しなければならない。バートンパークで、ダッシュウッド一家に家と馬車を提供するの家主のサー・ミドルトン (Sir John Middleton) とミドルトン令夫人 (Lady Middleton) の母ジェニングズ夫人 (Mrs. Jennings) である。つまり、エリナたちは精神と行動の自由の拠り所をミドルトン一家とジェニングズ夫人に押さえられることになり、絶えず彼らに注視され、プライバシーが保てない。しかし、一家は他に交際相手を選ぶことも出来ず、サー・ミドルトンとジェニングズ夫人の詮索の目が光る空間に閉じこめられる。

フランシス・R・ハート (Francis R. Hart) はオースティンの書簡を丹念に読み、空間の広さに関する言及が多い点を指摘し、オースティンは空間の大きさと人数のバランスが取れた状態を心地よいと感じていたと言う。<sup>5</sup> オースティンのバランス感覚は空間の物理的距離だけではなく、人間間の精神的距離にも及ぶ。バートンパークの中心的存在であるミドルトン夫妻とジェニングズ夫人はいずれも他者との距離感覚を欠いているため、親切に礼儀正しく接しているつもりでも、実は「干渉的な親密さ」か「空疎な形式」<sup>6</sup> になってしまうのである。「自宅に入りきらないほど大勢の若い男女を身边に集めるのを楽しみとし、彼らが騒々しくすればするほど喜ぶ」「内輪だけのパーティを避けたがる」(109) などの描写から、サー・ミドルト

ンには空間の広さと人数のバランス感覚がないことがわかる。サー・ミドルトンは他人と気持ちよく付き合うためには一定の距離が必要なことがわからず、出来るだけ多くの人間と頻繁に会い、長く一緒に過ごすことを何よりとする。オースティンは「何と奇特定の人情深いお人だろう！」(119) と、サー・ミドルトンの単純さを揶揄する。ジェニングズ夫人は悠々自適で暇を持て余し、ゴシップに興味津々で、若く美しくしかも適齢期のエリナたちは恰好の対象である。「友人同士の間で隠し事は無しにしましょう」(163) という言葉が示すように、ジェニングズ夫人は人間には誰しも触れられたくない部分があることを理解しない。ミドルトン令夫人はまさに「空疎な形式」を地で行く人物で、喜怒哀楽が乏しく、他人とのコミュニケーションが全く出来ない。当然の事ながら、令夫人が仕切る集まりは常に話題が乏しく、活気に欠け、退屈きわまるものである。

バートンパークの社交生活はエリナたちにとって居心地が悪いものになる。けれども、二人はミドルトン家・ジェニングズ夫人との交際に対して対照的な反応をする。メアリアンは「この家の家賃は安いんだそうね。でも、あちらうちに誰かが泊まるたびに、お屋敷で食事をしなければならないとしたら、ずいぶんきつい契約条件でことになるわね」と不平を言う。エリナは「先方では私たちへの礼儀と親切どころでしているおつもりなのよ」と、メアリアンをなだめる。わずらわしい交際だからといって、エリナはメアリアンのようにあからさまに反発することはなく、礼儀と親切心の表れと自分を納得させようとする。だが、エリナの真意は「あちらでのパーティがだらだらと退屈なものになっているとしても、あの方たちはべつに変わってないわ」ということであり、「変化のもとはどこか他に求めなければならないわね」(109) とあきらめる。自分たちを取り巻く監視の目や頻繁な社交行事を排除できないことをエリナは知っており、表面同調することが賢明だと思っている。エリナの不満は内向し、辛辣な観察眼という形で表れる。

社会が個人の生活に侵入・支配する空間で感情を露にすると、波風が立ちプライバシーをさらけ出すことになる。しかし、盲目的に社会の要請に

従うことは自己を殺すことにもなりかねない。「メアリアンなら自尊心が邪魔してとても出来そうにないちょっとした弁舌」(145)を使って、エリナは社会の義務を果たすと同時に自己主張をする。ミドルトン家でカードに誘われると、メアリアンは「一般の礼儀作法に無頓着に」(144)、カードは嫌いでピアノを弾きたい、と断る。エリナはルーシー (Lucy Steele) の縫い物を手伝うことを申し出て、ミドルトン令夫人の機嫌を損ねず、ルーシーと早急に話す目的をうまく果たす。エリナのやり方は巧妙で一種の演技とあってよい。マーヴィン・マドリック (Marvin Mudrick) はメアリアンを熱烈に弁護して、エリナの礼儀正しさは卑小で時に偽善になりがちである、とコメントする。<sup>8</sup> しかし、狭い監視社会で、プライバシーを守りプライドを傷つけられずに生きるためには、演技は必要な武器である。

エリナの分別と自制は、女性への制約が多い社会で、地位も財産もない女性が弱みを見せず自分を守るためである。没落したからといって、侮られることをエリナはよしとせず、誰に対しても礼儀正しくふるまい、抑制的な態度を取ることによって、ミドルトン家やジェニングズ夫人と精神的に対等であろうとする。エリナの気配りはメアリアンの分まで礼を尽くすことにまで及び、メアリアンの無礼をフォローする。ウィロビー (John Willoughby) の変心を知り自暴自棄になるメアリアンを、エリナはプライドを持って毅然として他人の悪意に負けないように、と励ます。だが、悪意や詮索から大切なものを守るためには、なりふりかまわず戦わなければならないこともある。エリナが意中の人エドワード (Edward Ferrars、ファニーの弟) のイニシャルを暴露されそうになったり、エドワードの母フェラーズ夫人 (Mrs. Ferrars) に侮辱された時、メアリアンは猛烈に怒り、エリナを助けようとする。エリナは他者の目を意識して“propriety”にこだわるあまり、行動力に欠けるところがある。オースティンは一方的にエリナを是とし、メアリアンを非としているわけではない。エリナとメアリアンは互いに欠点を補い、最終的に一つのところに歩み寄る相補的な存在なのである。

エリナとメアリアンの性格が対照的なため、『分別と多感』を読んでいくうちに、二人のどちらかに肩入れしたくなるのはマドリックならずとも当然であろう。しかし、オースティンの視点と道徳的判断をある程度代弁するのはエリナである。デヴィッド・カウフマン (David Kaufmann) はエリナが他者を評価するとき、“acquit,” “judge” などの法律用語を使うことに着目し、エリナの見る行為を裁判官の罪状認否、審理、判決にたとえる。<sup>9</sup> エリナは一方的に監視されるだけではなく、他者を冷静に観察し判断を下す。エリナの観察眼や判断力はものの分かった人間には信用され、そうでない人間にとっては無言の圧力になる。ブランドン (Colonel Brandon) とウィロビーは過去の秘密をエリナに打ち明け、判断を求める。ミドルトン令夫人はエリナのものの見方を辛辣だと感じ、内心疎んじる。ルーシーは俗物性と育ちの悪さを軽蔑されているように感じる。見る能力によって、地位と財産を持たないエリナは社会で他人と対等、もしくはほぼ対等な立場に立つ。エリナは人間を判断する難しさについて次のように語る：

“I have frequently detected myself in such kind of mistakes . . . in a total misapprehension of character in some point or other: fancying people so much more gay or grave, or ingenious or stupid than they really are, and I can hardly tell why, or in what the deception originated. Sometimes one is guided by what they say of themselves, and very frequently by what other people say of them, without giving oneself time to deliberate and judge.” (93)

他者を評価するとき、とかく主観・偏見に左右されやすいことをエリナは認識しており、客観的な目で言葉と表情を分析し、外見と内面の落差あるいは一致を見る。エリナの目を通して、ダッシュウッド家を取り巻く人々

の真実の姿が浮かびあがる。ミドルトン令夫人は当時の“genteel women”のカリカチュアであり、子供を甘やかすしか能がなく、「陳腐きわまる質問や意見以外には主張が何もない」(31)「退屈さは不動のもの」(55)「ぼんやり何もしていないでいる」(247)と、知的貧困と怠惰さは徹底した諷刺の対象になっている。パーマー氏 (Mr. Palmer) は無愛想で皮肉な態度をとることで愚かな妻に対する不満をまぎらわしており、知的につりあわない夫婦の典型である。フェラーズ夫人は意地悪そうな外見から、権高さとエリナに対する悪意を見透かされる。ブランドンは寡黙で物憂げであり、メアリアンは「才能や趣味のよさや活力はゼロ。理解力には冴えがなく、感情には熱がなく、声には抑揚がない」(51)と酷評するが、エリナは過去の心の傷を読み取る。隣人に対する観察は主として外見から受けるマイナスの印象を是正し（是正されない人物もいるが）、実態に近づく行為である。

エリナのウィロビーへの観察は前者とは逆の形を取る。他の家族はウィロビーが容姿端麗で社交上手な点に幻惑されて、欠点を見ないか善意に解釈する。けれども、ウィロビーがメアリアンを託すのにふさわしい人物か判断するために、エリナはあえて欠点に目を向けて外見に惑わされないように努める。ウィロビーは派手好きで財産以上の暮らしをしており、礼儀を軽視する傾向があるため、エリナは二人の結婚にあまり乗り気ではない。しかし、二人が愛し合っているならと譲歩し、自分の意見は表明しない。次に、エリナは二人の婚約の有無を知ろうとする。婚約の件をめぐって、エリナとダッシュウッド夫人 (Mrs. Dashwood) やメアリアンとの人間判断の姿勢の決定的な違いが明らかになる：

“I want no proof of their affection,” said Elinor; “but of their engagement I do.”

[Mrs. Dashwood] “I am perfectly satisfied of both.”

“Yet not a syllable has been said to you on the subject, by either of them.”

“I have not wanted syllables where actions have spoken so plainly. Has

not his behaviour to Marianne and to all of us, for at least the last fortnight, declared that he loved and considered her as his future wife, and that he felt for us the attachment of the nearest relation? Have we not perfectly understood each other? Has not my consent been daily asked by his looks, his manner, his attentive and affectionate respect? My Elinor, is it possible to doubt their engagement? . . .”

“I confess,” replied Elinor, “that every circumstance except *one* is in favour of their engagement; but that *one* is the total silence of both on the subject, and with me it almost outweighs every other.” (79–80, italics are in the original)

エリナは家族の中で一番世間を知っており、美貌で財産がない女性は男性の火遊びの相手になりやすいことを承知しているので、ウィロビーの心変わりを防ぎメアリアンの結婚を保証するために、二人の婚約の公表を求める。エリナの子細な観察はメアリアンとウィロビーの一挙手一投足に及び、沈黙が二人の性格に合わないこと、ウィロビーの突然の出立、いつもと違う態度等々、現在の事実に基づいて婚約の成立はないものと結論を出し、ウィロビーの変心の可能性まで考える。外見と中身が違うケースが多いことをエリナは理解しているので、自分たちにとって不利なことにも目を背けず、客観的な判断をする。それに対して、ダッシュウッド夫人はウィロビーの遠縁にあたるスミス夫人 (Mrs. Smith) が二人の結婚に反対しているに違いないと断定し、過去のウィロビーとの親交、隣近所での人気などを理由にウィロビーを弁護する。ダッシュウッド夫人の判断は未知の人間に対する憶測、希望的観測、伝聞などの不確実な要素に基づいており、根拠が甚だあいまいである。メアリアンとウィロビーの件に関しては、エリナの判断通りの結果になる。だが、自身の恋愛に際しては、エリナは主観的判断をする方が多い。エリナは理性・客観性を示す “sense” を体現すると解釈されがちだが、小説の進行につれ矛盾した一面を見せる。



プライバシーがすぐ公になる空間においても、真実を知ることが容易ではない。エドワード、ルーシーとの三角関係では、エリナは常に受け身の存在に立たされ、的確な観察はかえって自身を苦しめる。

『分別と多感』全体を通して、エドワードの存在感は希薄である。最大の原因は「熱意が欠けている」(“a want of spirits,” 22)「はにかみ、よそよそしさ、寡黙さ」(“shyness, coldness, reserve,” 90)という言葉がエドワードを形容するのに頻繁に使われることからわかるように、活気のなさや口数の少なさである。エドワードの真意を知るのは非常に困難であり、エリナはエドワードのわずかな表情や言葉の端々から自分を愛しているというサインを読み取ろうとする。

エリナとエドワードの愛情の芽生えは事後報告的に語られるだけで、エドワードの求愛の言葉もエリナの応答も一切描かれていない。それどころか、エリナはエドワードの気落ちした様子、熱意の欠如を見て取り、エドワードの自分への愛情に不安を感じることが多い。エドワードがエリナを愛しているというはっきりした証拠は何もない。にもかかわらず、エリナはエドワードの愛情を感じ、エドワードの鬱々として楽しまない態度の理由を、フェラーズ夫人の反対、自立した財産のないことなどと、あれこれ推測する。エリナのエドワードへの愛は一目ぼれに近く、メアリアンのウィロビーに対する愛情と酷似しているのである。

エドワードのバートンパークへの訪問と出立は、前述のウィロビーの慌ただしい出立と同じパターンをたどる。エドワードは相変わらず「よそよそしく寡黙」であり、エリナは屈辱、苛立ち、怒りを感じる。だが、「現在よりも過去への思いで律していこうと心に決め」(89)、表面は平静さを保つ。「その人柄を知らないだけに、息子の不可解な点をすべてその責任にしまえるような母親がいるのは幸い」(101)とばかり、エリナはエドワードの短い滞在と元気のなさをすべて会ったこともないフェラーズ夫人のせ

いにする。エドワードがはめている髪の毛入りの指輪に関しては、髪を送ったおぼえもないし、密かに髪を手に入れることは生真面目なエドワードの性格に合わないのにもかかわらず、自分の髪だと思い、エドワードの愛情の証を見たような気になる。エリナはエドワードを冷静かつ客観的に観察できず主観的思考に終始し、他の女性の存在をはっきりと物語る髪の毛入りの指輪に対しては判断を誤る。<sup>10</sup>

恋敵ルーシーはエリナと同等の分別と常識があり、強敵である。ルーシーの第一印象は「反応の鋭い鋭敏そうな目と利口そうな感じ」(120)であり、監視能力に加えて性的魅力を持つ。バーバラ・ハーディ (Barbara Hardy) はルーシーとベッキー・シャープ (Becky Sharp) との相似を指摘している。<sup>11</sup> 自分にとって役立つ人間を瞬時に判断し、結婚相手になりそうな男性には性的魅力を利用し、女性に対してはなりふり構わず追従し、いつのまにか籠絡するルーシーの手並みはベッキーと同等かそれ以上である。エリナはルーシーの美貌と謙遜にごまかされず、「真の気品と純真さに欠けている」(127) 点に気づく一方、「それなりの分別」 (“some kind of sense,” 120) は評価する。ルーシーはミドルトン夫妻、ジョン・ダッシュウッド夫妻、フェラーズ夫人に取り入って、彼らの警戒心や監視を和らげ、エリナに対抗する。エリナを嫌う勢力と結びついたことで、ルーシーはさらに手強い相手になる。

エリナとルーシーが対峙する場面が二つある。まず最初は、ルーシーがエドワードとの婚約の事実を告げるときである。エドワードの肖像と手紙、バートンパークに来る前よそに寄ってきたというエドワードの話とルーシーの話との符合、エドワードに髪の毛入りの指輪を送ったという言い分など、客観的な証拠を添えて、エドワードと親密な関係にある者でしか知るはずのない話を次々と聞かされて、エリナはエドワードとルーシーの婚約を認めざるをえない。しかし、一時の動揺が収まると、エリナはルーシーの嫉妬と牽制の意図を直感し、真相を知ろうとする：

[Lucy] “He [Edward] has only two thousand pounds of his own . . . . I

have been always used to a very small income, and could struggle with any poverty for him; but I love him too well to be the selfish means of robbing him, perhaps, of all that his mother might give him if he married to please her . . . .”

[Elinor] “That conviction must be every thing to you; and he is undoubtedly supported by the same trust in your’s. If the strength of your reciprocal attachment had failed, as between many people and under many circumstances it naturally would during a four years’ engagement, your situation would have been pitiable indeed.”

Lucy here looked up; but Elinor was careful in guarding her countenance from every expression that could give her words a suspicious tendency. (147)

表面は礼儀正しく穏やかに会話を続けながら、エリナとルーシーは相手の言葉と表情に神経を集中し、相手の真意を知り自分に有利な情報を引き出そうとする。エリナはルーシーを監視するだけではなく、ルーシーに監視されている自分をも意識し、平静さを保とうとする。エドワードの愛に自信が持てず、エドワードとルーシーの関係については恋敵からの情報しかないため、エリナにとってこの戦いは不利である。しかし、「ごくわずかな収入でやっていくのはもともと慣れているし、彼のためならどんな貧乏にだって立ち向かっていける」「彼を心から愛しているだけに、彼がお母様の気に入るような結婚をすればもらえるかもしれないものを、私のためにひょっとしてすべてふいにさせてしまうような身勝手な真似はできない」という言い分の矛盾にエリナは気づき、ルーシーのエドワードへの接近が欲得ずくであることを見抜く。エリナはエドワードの親しい親戚、ルーシーの助言者の姿勢を崩さず、見る能力に加えて聞く能力を駆使してルーシーと渡り合う。

エリナは社交シーズンのロンドンで再びルーシーと対決する。この時は、エドワードも来合わせて、三人の対面の瞬間はばつが悪く緊張したものになる。エリナとルーシーはその場の主導権を取ろうと火花を散らす。

ルーシーはエドワードに対する優先権を楯に一言も言葉を発せず、エリナとエドワードを監視し、二人の感情の交流を妨害しようとする。エリナは「観察力の鋭い」ルーシーの視線を痛いほど意識しながらも、「自分に対して不正直だという意識にひるむことなく」(241) 近い親戚に対する礼儀という名目でエドワードと言葉を交わす。そればかりか、「けなげな気持ち」「高潔極まる気丈さ」(242) で、エリナはエドワードとルーシーを二人きりにしてやる。エリナは「エドワードと自分のため」(241) と気をふるい立たせて、親戚という立場を最大限に利用して過剰なまでの演技をする。

エリナ自身がいみじくも気がついてるように、エリナの行動は欺瞞的で「マゾヒスティック」<sup>12</sup> でさえある。家族に心配をかけないため、また、ルーシーを筆頭に他人に弱みを見せないために、エリナはあくまで気丈にふるまう。エリナの一連の行為はそれなりに立派ではあるが、釈然としないものが残る。ルーシーとの婚約が原因で、エドワードがフェラーズ夫人の怒りを買い廃嫡されると、ルーシーはエドワードを捨ててエドワードの弟ロバート (Robert Ferrars) と結婚する。ルーシーの変わり身の早さに比べると、エリナはいかにも不器用で柔軟性を欠く観は否めない。この点に関して、鈴木美津子氏は約束をキーワードにして『分別と多感』の登場人物を二分し、エリナの約束や礼儀を守ることに汲々とする態度の裏に、保守主義の限界、危険、欺瞞が潜んでいる、と分析する。<sup>13</sup> エドワードの愛情を確信し、ルーシーはエドワードにふさわしくないと思いながらも、エリナはエドワードに婚約破棄を決意させるために何の行動も起こさない。財産が少ない女性の結婚が難しい事実からして、エドワード以外に新しい相手が現れる可能性は少なく、将来の経済的困窮は目に見えている。<sup>14</sup> さらに、約束を守ろうとするエリナの誠実さにルーシーは値しない。詮索や悪意からプライバシーを守るのにはエリナの演技は有効なものの、苦境を克服して運命を切り開くのには役に立たない。オースティンはエリナの分別とプライドを認めながらも、社会の監視の目を過剰に意識することが往々にして自己の幸福追求のために行動する力を奪い不幸を招くこと、細心の心配りに値する人が少ないことを述べ、エリナの演技に疑問を投げか

ける。

#### 4

エリナが演技を武器にして監視社会に対抗する一方、メアリアンは社会に正面きって立ち向かい、衝突をくり返す。ただし、エリナの巧妙さに比べると、メアリアンのやり方はあまりにも生硬であり、メアリアンのプライバシーはゴシップ・中傷の的になる。失恋、裏切り、病気などの形で、メアリアンはエリナよりも手厳しくプライドを傷つけられる。エリナの苦悩が社会を意識するゆえの隠蔽・韜晦に起因するのと違い、メアリアンは社会への不適応が原因で痛手を被る。

メアリアンの性格については「感じやすく、利発だが、ただ、何ごとにおいても熱烈だった。悲しいにつけ、嬉しいにつけほどほどということがない。心が広く、気立てもよく、おもしろみのある娘だけれど、思慮深いとだけは到底言えない」(6) とある。エリナと同等の才知を持ちながら、メアリアンは感情を抑えることを「無用の努力」「陳腐で誤った観念への理性の不名誉な屈服」(53) と考えて嫌う。他人の監視を警戒して、演技をしたり隠したりすることはメアリアンにはありえない。「心にもないことは言えなかった」(19)「率直さは恥ではない」(53)「思った通りのことを軽率に口にしていた」(98) という描写から、メアリアンは率直な反面、プライバシーを守るという点ではあまりにもあけすけで無防備なことがわかる。恋愛と社会生活の場で、メアリアンのマイナス面ははっきり現れる。メアリアンはウィロビーへの愛に溺れ、他人の目を全く気にせず、エリナから見れば軽率で分別に欠ける行動を取る。また、自分の感性に合わない人間に対して、メアリアンはあからさまに不寛容な態度で接する。メアリアンは社会の監視を無視して反抗と逃亡を試み、失敗を通して、自分も監視社会の一員であることを認識し、社会と折り合う叡智を身につける。この項では、メアリアンの監視社会からの逃亡と反抗、挫折と再生を追うことで、メアリアンの成長を見てみたい。

メアリアンは音楽、読書、自然を愛し、ロマンスのヒーローが自分の前に現れることを夢見ている。メアリアンの嗜好は当時流行していた感性重視と感傷小説に対する諷刺との見方が定着している。だが、メアリアンの一連の行動には単なるパロディーだけではなく、現状に対する不満と逃避願望を見ることが出来る。メアリアンは一家の没落を家族中で一番つらく感じていて、「何人かの使用人、一台か二台の馬車、何頭かの狩猟馬」(91)を結婚生活の必需品としてあげる。ジェントリーの道具立てへのこだわりからもわかるように、メアリアンは過去の生活と精神の自由を取り戻したいのである。プライバシーを侵害され、つまらない交際を強要されるバートンパークでの生活は、メアリアンにとって屈辱と苛立ちの連続である。メアリアンは卑俗な人間と社会から離れて、好きなロマンスの世界に逃れようとし、ウィロビーをパートナーに選ぶ。メアリアンが理想の世界に逃げ込むためには、ロマンスのヒーローを思わせる容姿と男性的魅力を持つウィロビーはうってつけの相手である。

メアリアンの恋愛観は「愛情が強烈な場合は自制は不可能なことだし、穏やかなものなら自制できても偉くはない」(104)ということであり、感情のおもむくままに行動する：

When he [Willoughby] was present she [Marianne] had no eyes for any one else. Every thing he did, was right. Every thing he said, was clever. If their evenings at the park were concluded with cards, he cheated himself and all the rest of the party to get her a good hand. If dancing formed the amusement of the night, they were partners for half the time; and when obliged to separate for a couple of dances, were careful to stand together and scarcely spoke a word to any body else. Such conduct made them of course most exceedingly laughed at; but ridicule could not shame, and seemed hardly to provoke them. (53-4)

他者を排除・無視することで、メアリアンはウィロビーと二人だけの世界に閉じこもり、全身で熱愛を表現する。ウィロビーとの世界に他者が存在

する余地は全くないので、冷やかしゃあざけりは「恥ずかしくなく」「怒るようなことではない」のである。

メアリアンとウィロビーとの交際は、他人と社会から逃亡し、自分だけの世界に入り込む行為で成り立っている。「いいかげんな口実をもうけて」(75)、メアリアンは他の家族と一緒にミドルトン家に行かず、ウィロビーを待つ。ウィロビーがロンドンに出発すると、メアリアンは一晩中泣き、家族と話をせず、食事もとらず、ウィロビーと楽しんだ本を読み歌を歌い、悲しみをさらにかきたてて、自分の世界に閉じこもる。「彼女の感受性はまったくもって豊かだった！」(83)「沈黙と孤独と無為を自ら求めることで悲しみをつのらせ、不動のものにするやり方」(104)と、語り手とエリナ両方の視点を通して、オースティンはメアリアンの感情耽溺を皮肉り、批判する。しかし、「若い人の偏見には愛すべきものがある」「若い心のロマンチックな高尚さ」(56)と、メアリアンに思いを寄せるブランドンは、多少身びいき的な面はあるにせよ、メアリアンの行動を好意的に見る。つまり、オースティンはメアリアンを批判しながらも、理解している。メアリアンの欠点とされている部分は、見方をかえるとエリナにない魅力でもあり、思慮が足りない夢見がちの少女という類型にとどまらない複雑さがある。

ウィロビーを熱愛するあまり、メアリアンは「熱中や好意を表に出してはならない」「知識を披露してはならない」「女性の方から愛してはいけない」<sup>15</sup>などの、社会が女性に課したしなみをことごとく無視する。そのきわめつけがスミス夫人の地所アレナム (Allenhams) にウィロビーと二人だけで行くことである。初めての家を突然訪問するのはプライベートな領域への無作法な侵入で、しかもスミス夫人は留守である。さらに、婚約もしていない男性と長時間二人きりになることは、当時の性道徳ではタブーである。ダッシュウッド夫人はメアリアンの行動を「若々しく熱烈な心に生まれた強い愛情の当然の結果」(54) と思って放任しているため、本来なら母親の役目である訓育をエリナが引き受ける：

[Marianne] “... if there had been any real impropriety in what I did, I should have been sensible of it at the time, for we always know when we are acting wrong, and with such a conviction I could have had no pleasure.”

[Elinor] “... as it has already exposed you to some very impertinent remarks, do you not now begin to doubt the discretion of your own conduct?”

“If the impertinent remarks of Mrs. Jennings are to be the proof of impropriety in conduct, we are all offending every moment of all our lives. I value not her censure any more than I should do her commendation.”  
(68)

エリナは世間の監視を認識しているので、若い女性が男性と二人きりになると何かと誤解を招くと暗に言い、反省をうながす。メアリアンは悪いことをしているときには必ずそれはわかるものだ、と反論する。善悪を決めるのは世間の約束や礼儀ではなく自分自身であり、人間には判断力が備わっているのだから間違いを犯すはずがない、とメアリアンは自分自身の直感を絶対視する。そして「ジェニングズ夫人の非難も誉め言葉も気にしない」と、監視の目を無視・対決する姿勢をさらに強めていく。

メアリアンの感性重視は他者との精神的距離のとり方にも影響を与える。つまり、好きな人間への盲目的信頼と嫌いな人間の徹底的排除の二極化である。極度に理想化されたウィロビーは「やることなすことすべて正しく気がきいている」(54)。ミドルトン夫妻、ジェニングズ夫人、ブランドン、異母兄夫婦ジョンとファニー、スティー爾姉妹に対しては、メアリアンは軽蔑・嫌悪を露にする。エリナのように他者と一律に距離を置いて冷静に観察することはメアリアンには出来ず、好きな人間には過剰に接近し、嫌いな人間からは出来るだけ遠ざかろうとする。また、プライバシーを守ることには無警戒で、誰に対しても自分の感情をさらけ出す。メアリアンの偏った人間判断とプライバシーに対する無防備な姿勢のつけはウィロビーの心変わりという形で回ってくる。メアリアンは絶望感そのままに



行動し、神経過敏になり、食事も睡眠も取らず、衰弱する。トニー・タナー (Tony Tanner) はメアリアンの情緒不安定、周りの目に対する無感覚などに、精神病と狂気の兆候を見る。<sup>16</sup> ウィロビーを失い、監視社会からの逃亡は頓挫し、メアリアンは行き場をなくしたエネルギーのはけ口を自己破壊的な行為に求める。

精神と肉体の病で死線をさまようメアリアンは、病気の回復をきっかけに持ち前の「おもしろみ」(6)に加えて、「しっかりした知性と妥当な判断力」(350)を身につける。自分は今まで他人に対して不公平で傲慢だった、とメアリアンは言い、それまで軽視もしくは無視していた礼儀を「生活上のより小さな義務」(347)と位置づける。ウィロビーの金目当ての結婚もある程度までは理解し、「(ウィロビーの過去の秘密を知れば) 幸せになれるはずはない」(350)「わたしの幸福が彼の目標だったことは一度もない」(351、傍点は原文イタリック)と醒めた見方をする。メアリアンはミドルトン夫妻、ジェニングズ夫人、ブランドン、異母兄夫婦、スティール姉妹たちとのへだたりを縮め、ウィロビーを世の男性と同列に置いて、他者との偏った距離感覚をバランスの取れたものに修正する。

ブランドンがメアリアンの心を捉える過程がまったく書かれていないので、メアリアンとブランドンの結婚はいかにも唐突で、歯切れの悪さを感じている批評家は多い。例えば、マドリックは、オースティンはメアリアンを因習の棺に押し込めたのであり、中流の結婚生活はメアリアンの性格に合わない、と言う。<sup>17</sup> だが、「女性のアイデンティティが家柄や婚姻で決まる社会」<sup>18</sup>において、メアリアンにとって結婚は社会に復帰して生き残るために不可欠である。一步間違えば“fallen woman”になっていたかもしれないメアリアンはジェントリーの妻になり、夢見ていた通り、年収2,000ポンドの生活と使用人、馬車、馬を手に入れる。ブランドンとの結婚によって、メアリアンは失ったものを取り戻し、社会に安定した地位を築くのであり、オースティンのメアリアンを生かそうとする意図が感じられる。

## 結 論

以上、『分別と多感』における社会の監視とエリナとメアリアンの身の処し方を見てきた。エリナは他人の好奇心と悪意を知り抜いているため、「自分に対して不正直」なくらい感情を抑制し、必要なときは演技をする。演技は監視からエリナのプライバシーを守るために有効である。しかし、恋愛においては、過剰な演技は却って災いし、自らを窮地に陥れる。恋愛が情熱を表現し、自己の幸福追求を目的とするものならば、エリナがエドワードとルーシーとの間で終始損な立場に立たされるのはもっともである。エリナの抑制的な態度は、ともすれば受動的で消極的な生き方になりがちである。エリナと対照的に、メアリアンは感情をさらけ出し、周りを見ないか無視することで、自分の世界に閉じこもり、監視的な空間から逃れようとする。メアリアンは他者との距離をうまく取れず、プライバシーを暴き出そうとする監視の目に対して無防備である。他者に対する評価は甘すぎるか厳しすぎるかどちらかで、その結果手ひどい裏切りに遭い、社会の中で孤立する。社会と程よく距離をとり、他者を客観的に観察する術をメアリアンは学ばなければならない。

エリナとメアリアンに共通するのは、社会の監視に対する苛立ちと逃れたいという願望である。エリナは社会の礼儀や道徳に従順に見えるけれども、プライバシーを侵害する社交や人物を辛辣に見つめる。「変化のもとはどこか他に求めなければならない」というエリナの言葉はオースティンのあがきともとれる。前述のように空間の広さと人数のつり合いに鋭い感覚を持っていたオースティンにとっては、狭い共同体での生活は時として息苦しいものであったに違いない。周囲の目から逃れたくても逃れられないオースティン自身のジレンマがエリナの声には感じられる。オースティンは現実の世界で解消できないフラストレーションを小説の世界で昇華させる。メアリアンの率直さと反抗もまたオースティンの分身である。

社会の監視に対するオースティンの屈折した思いは秘密の婚約の成就に

最もよく表れている。ルーシーはエリナやメアリアンよりも監視の網を巧妙にかいくぐり、最後に自分も監視者の側に立つ。長年にわたる秘密裏の婚約、一方的な婚約破棄、別の男性との駆け落ち同然の結婚は、当時の道徳からはなはだしく逸脱している。しかし、ルーシーはさほど非難を受けることもなく、エリナやメアリアンと同等の幸福を得る。ルーシーはあくまでも敵役であり、オースティンはルーシーの利己主義と狡猾さを皮肉ってはいるが、「はぶりのよさ」(“prosperity”)、「きわめて力強いお手本」(“a most encouraging instance,” 376)という言葉はオースティン流のひとひねりした承認の言葉なのである。駆け落ち、秘密の婚約・結婚というテーマは以後の小説でも扱われている。特に、ジェイン・フェアファクス (Jane Fairfax) はエマと同じくらい美貌で洗練されており、ルーシーのようになりふりかまわずお世辞を振りまくことなく秘密の婚約を成就させる。

結婚したエリナとメアリアンは近くに住み、「喧嘩一つせず夫同士の間  
に冷ややかさを生じさせることもなく」(380)、夫婦単位で円満な関係を築く。つかずはなれずの距離をおいた上での親密な関係はプライバシーが保たれており、オースティンの理想の人間関係といってよい。だが、ルーシーとファニーは夫を巻き込んで反目し、ロバートとルーシーはしばしば喧嘩する。それにもかかわらず、ロバート/ルーシー、ジョン/ファニーの二組の夫婦とフェラーズ夫人もまた仲良く暮らす。サー・ミドルトンとジェニングズ夫人はダッシュウッド家の末娘マーガレット (Margaret Dashwood) の縁談に新たな熱意を燃やす。プライバシーを重視した新しい人間関係が生まれる一方で、旧態依然とした社交生活も変わらず存続する。既存の社会を完全に改革するのは至難のわざで、オースティンは部分的に新しいものを取り入れることで、現状を少しでも改善しようとしたのであろう。『分別と多感』の結末には、部分的な改革による既成社会の保守を望むオースティンの一面が見られるのである。

## NOTES

1. Francis R. Hart, "The Spaces of Privacy: Jane Austen," *Nineteenth-Century Fiction* 30: 3 (Dec. 1975): 306-7.
2. Lionel Trilling, *Sincerity and Authenticity* (1972; London: Oxford UP, 1974) 113-4.
3. Jane Nardin, *Those Elegant Decorums: The Concept of Propriety in Jane Austen's Novels* (New York: State U of New York P, 1973) 24.
4. Hart 310.
5. Hart 314-7.
6. David Kaufmann, "Law and Propriety, *Sense and Sensibility*: Austen on the Cusp of Modernity," *ELH* 59 (1992): 397.
7. Jane Austen, *Sense and Sensibility*, Vol. 1 of *The Novels of Jane Austen*, ed. R. W. Chapman, 3rd ed. (1811; Oxford: Oxford UP, 1933) 32. 以下括弧内にページ数を示す。日本語部分は、真野明裕訳『いつか晴れた日に一分別と多感』（キネマ旬報社、1996）を適宜参照した。
8. Marvin Mudrick, *Jane Austen: Irony as Defense and Discovery* (Princeton, NJ: Princeton UP, 1952) 73-4.
9. Kaufmann 386.
10. 髪を送る行為はすなわち体の一部を差し出すことで、親密な関係を意味する。トム・ウィニフリス (Tom Winnifrith) はエドワードとルーシーの間にすでに性交渉があった可能性を示唆する (*Fallen Women in the Nineteenth-Century Novel* [London and Basingstoke: Macmillan, 1994] 25).
11. Barbara Hardy, *A Reading of Jane Austen* (1975; London: Athlone, 1979) 71.
12. Kaufmann 397.
13. 鈴木美津子, 『ジェイン・オースティンとその時代』(成美堂, 1995) 117-8.
14. 『高慢と偏見』(*Pride and Prejudice*, 1813) で、エリザベス (Elizabeth Bennet) に求婚を断られると、コリンズ (Collins) は次のように言い、翻意を促す: "... it is by no means certain that another offer of marriage may ever be made you. Your portion is unhappily so small that it will in all likelihood undo the effects of your loveliness and amiable qualifications" (Vol. 2 of *The Novels of Jane Austen*, 108).
15. John Gregory, *A Father's Legacy to His Daughters*, ed. Gina Luria (1774; New York and London: Garland, 1974) 29, 32, 80.
16. Tony Tanner, *Jane Austen* (Cambridge, MA: Harvard UP, 1986) 82.
17. Mudrick 91-3.
18. Kaufmann 392.